

説教余滴、2019年6月30日「足元は泥沼」

3月17日、婦人会・エレミア会合同礼拝で説教をさせていただきます。

その原稿を調べる必要に迫られました。するとその最後、欄外に下記の文章がありました。

話した記憶がありません。ご紹介しておきたい、と感じました。

横浜 YMCA 広報紙 [YMCA News] 第一面下、
ホドス欄（ギリシャ語で道）

（準）のサイン入り、2019年3月号

娘の中学の卒業式でした。卒業する自分の学年の合唱の『翼をください』の伴奏をしたのです。「いま、願い事がかなうならば翼が欲しい。この背中に鳥のように、白い翼をつけてください。この大空に翼を広げ、飛んで行きたいよ・・・」のクラスの生徒たちの大きな声のハーモニーは講堂を圧巻しました。何回か私の運転でスキーに連れて行った友達の姿も見え、まさに大空に飛ぶような希望に満ちた光景は父親の心を熱くしてくれました。それから20年がたっても卒業式の季節のなると、娘たちのあの特別の時を思い出します。青の卒業式の新しい出発のイメージ、翼を広げて大空に飛び立つ鳥、いかにもさわやかで力に満ちたものです。

ところで悲しみのない自由の空へ翼をはためかせたいときらきら歌ったあの子達も、その後の卒業式を経て壮年期の入り口に向かっています。

あの時の私の娘は、今仕事と3歳と5歳の子育てに奮闘しています。娘は多忙なこの頃の日常を、地面をチョコチョコと飛び歩く鳥スズメにたとえ、大空を飛ぶはずの足下は泥沼だ、今はゆっくり寝る時間が欲しいとなんとも現実的な言葉を吐いています。私の励ましです。古代エジプトの白い羽毛のトキは長いくちばしをもち、人にはわからない沼地の底にくちばしを入れて毎日餌を探し出しました。その能力を、人は見て、知識の神トトの化身だと崇拝したのです。大空だけが人生でなく、地面も沼地も素敵です。